

田島 征三

1996年、日の出の森の中に、ぼくたちの土地があり、周りの森が急速に切り裂かれている時期だった。ここで行われている環境破壊と処分場稼働後、確実に起こるはずの環境汚染を世の中の人々は知らない。こんな山の中で秘密裏に行われていることを誰かに伝えたい。そんな思いで書き始めた童話「もりもりさまの森」は昨年(2016年)、理論社から出版された。

初め「処分場建設反対運動のプロパガンダ」と目されていた傾向があったが、読み広がる中で森の生き物になりきって描いた人間への深いメッセージを感じてもらえるようになったと思う。3月始めには増刷になり、専門誌にも紹介され文学的評価を得たように、ぼくは思い勝手に喜んでいる。今はもう化学物質にまみれた廃棄物の底で殺された森は、ぼくにたくさんのことを伝えようとした。その一つは文学となったが、この瞬間もぼくの筆先から生まれる絵は、あの森で出会った生き物たちがモデルだ。そしてまた瀬戸内海、高松沖に浮かんでいる大島というハンセン病者の収容所であった場所に、ぼくは「森の小径」という芸術作品を創っている。

この作品もまた、日の出の森で感じたイメージが形になろうとしている。共に闘った国際的彫刻家、若林奮の作品「緑の森の一角獣座」は強制収容されて破壊されたけれども、その素晴らしさは人々の心に残っている筈だ。それには及びもつかないけれど、小径を通る人々に安らぎと植物との語らいを体験していただけたらと願っている。

ぼくは、69才になって、初めて空間を作品にする仕事に挑戦した。(「絵本と木の実の美術館」の空間絵本)そして、今、70も後半になって作庭の芸術作品に取り組んでいる。

作庭と言っても、貴族や武士階級の庭ではない。ましてや、成金の贅沢な庭造りでもない。病と差別、そして国家により、生きる権利、名前すら取り上げられて閉じ込められ続けた60数年、その魂を慰める庭。決して、宗教的な庭ではない。

